

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：15401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22241

研究課題名（和文）現地の教育と学習者中心型教授法から生成するオルタナティブ教授法—タンザニアの事例

研究課題名（英文）Toward an alternative to learner-centred pedagogy: A bottom-up approach to valued educational practices in Tanzania

研究代表者

坂田 のぞみ（Sakata, Nozomi）

広島大学・I D E C 国際連携機構：CICE・助教

研究者番号：90881300

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、タンザニアを事例として、(1)教育借用されてきた学習者中心型教授法、(2)タンザニアで受け継がれてきた教育思想、(3)現代の教育関係者が価値を置く教授法、の三要素間で輻輳性と相乗効果を検討した。比較事例研究法とケイパビリティ・アプローチを用い、異なる政策レベルにおける学習者中心型教授法の理解、タンザニア教育開発の歴史と、半構造化インタビューとフォーカス・グループ・ディスカッションを通して、現代において価値があると考えられている教授法について調査した。先の(1)、(2)、(3)の類似点と相違点を明らかにし、タンザニアの基層文化に即したオルタナティブな教授法の生成を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際教育開発分野では、「万国に共通して効果的な教授法」として、学習者中心型教授法（アクティブラーニング、協調型学習など）が発展途上国へ教育移転されてきた。しかし、欧米の教育哲学や思想に基づく本教授法と、途上国で普及する教師中心型教授法の二項対立を超え、現地の社会文化に根つき、かつ高い学習成果を生み出せる第三の教授法は体系的に確立されていない。

本研究で析出されたオルタナティブ教授法の構築過程により、ある国・地域の歴史・文化に根差し、かつそこで現代を生きる人々が理想と考える教授法を編み出すアプローチ法を提示したといえる。

研究成果の概要（英文）：Amid the global surge of learner-centered pedagogy (LCP) as a “universal panacea,” this research proposes an alternative pedagogical framework in Tanzania based on (1) historically nurtured pedagogies, (2) currently valued pedagogies, and (3) a flexible approach to LCP. Using the comparative case study approach and the capability approach, the research explored educational development in Tanzania through a historical lens, the interaction of LCP discourse at different policy levels, and pedagogies conceived as being of value examined through semi-structured interviews and focus group discussions. The findings indicated that some principles of LCP were espoused by all three aspects above, while other LCP concepts were supported by one or two of them. It is suggested that seeking the overlapping pedagogical elements over time and across different policy levels will offer an alternative means to pursue locally appropriate pedagogies in a given setting.

研究分野：教育開発学

キーワード：タンザニア 学習者中心型教授法 オルタナティブ教授法 自立のための教育 比較事例研究法 ケイパビリティアプローチ アフリカ

1. 研究開始当初の背景

1990年各国によって批准された「万人のための教育」を皮切りに、「万国に共通して効果的な教授法」として、学習者中心型教授法(アクティブラーニング、協調型学習など)が発展途上国へ教育移転されてきた。アジアやアフリカ各国の教育政策は、教師中心型教授法や一斉授業を否定し、参加型学習や問題解決型学習を推し進めている。しかし多くの先行研究が、学習者中心型教授法は途上国の学校現場でほぼ実施されておらず、実施されても学習効果が上がるわけではないことを実証している(Schweisfurth 2011)。その理由の一つに、本教授法は欧米の教育哲学や思想に基づいて発展してきたため、途上国の文化や教育現場に見合わない点がある。平等な教師・生徒関係やグループ学習は、先進国の価値観に沿った「良い教育」の理念であり、社会文化的背景が異なる途上国で模倣させることには、大きな疑義が呈される。また、学習到達度調査(PISA: Programme for International Student Assessment)で上位を占める上海や香港などは、相当な割合で一斉授業を行っており、学習者中心型教授法が全世界的に学習効果を生み出すかは疑わしい。ただし、学習者中心型か教師中心型かといった二項対立を超え、途上国現地の社会文化に根つき、かつ高い学習成果を生み出せる第三の教授法を体系的に確立した研究は皆無である。

そこで本研究では、タンザニアを事例として、同国の思想的背景と学習者中心型教授法の輻輳や相乗効果の可能性を検討したのち、オルタナティブな教授法生成を試みた。タンザニアの教育システム発展過程を振り返ると、同国は学習者中心型教授法と親和性の高い教育思想を有することが観察される。自国を独立に導いた初代大統領ニエレは、「自立のための教育(Education for Self-Reliance)」(Nyerere 1967)を通して、口承伝承など植民地時代以前に用いられてきた教育方法に立ち返ることを推進した。ニエレはまた、具体的な教育方法として、児童とコミュニティが協働で学校教育やその運営に携わることを期待し、体験型学習や協調型学習を推奨した。

一方、世界的に教育移転されている学習者中心型教授法に関して、Bremner(2021)は次の6つの教授的特徴を「学習者中心」と定義づけている：学習者の積極的参加、スキル重視の協働・実践型学習、学習者が持つ興味関心との合致、教育者と学習者との間の平等的関係性(権力配分)、自立性、形成的評価。

本研究では、教育移転されてきた学習者中心型教授法の教授的特徴(Bremner 2021)と、ニエレが提唱した「自立のための教育」(Nyerere 1967)、また、現代タンザニアの教育的価値観と相入るかを検討するべく、以下の問いを立てた：(1)タンザニアで、ウジャマー思想に基づく「自立のための教育」はどう変容し、現代の教育関係者に受け継がれているか、(2)「自立のための教育」と、学習者中心型教授法の間、輻輳性や相乗効果は見い出せるか、(3)「万人のための教育」に基づく教授法と融合できるような、オルタナティブな教授法をタンザニアで生成するための思想的基盤は何か。

2. 研究の目的

本研究の目的は、タンザニアで受け継がれてきた教育に対する価値観と学習者中心型教授法との輻輳性や相乗効果の可能性を探り、現代タンザニアにおいて「自立のための教育」がより効果を発揮し、かつ学習成果を生み出せる教授法を生成することである。(1)元来タンザニアで継承されてきた教育思想・哲学、(2)教育移転されてきた学習者中心型教授法、(3)現代の教育関係者が考える教育のあるべき姿、の類似点と相違点を比較検討し、三要素間の関連性を明らかにした上で(4)オルタナティブな教授法を生成する。

3. 研究の方法

比較事例研究法を用いて、タンザニアをとりまく教育政策の変遷(政策レベル間比較)、同国の歴史的変遷や文化的背景(時空間比較)が、現代の教育関係者が持つ学習者中心型教授法の解釈やその実施度合い(事例比較)といかに関連しているかを調べた。まず、(1)タンザニアで受け継がれてきた教育に対する価値観、特にウジャマー思想に基づく「自立のための教育」と、(2)学習者中心型教授法の思想基盤や教育哲学、の間に共通性が見られるかを政策分析と文献調査を通して検討した。

タンザニア現地では、教育関係者(教員、児童、保護者、市民団体、教育政策立案・実施に関わる政策関係者)に聞き取りを行い、「自立のための教育」に関連する価値観が現代タンザニア人いかに受け継がれているかを調査した。ダルエスサラームで小学校3校を訪れ、2~4人の教員と2人の保護者を対象に半構造化インタビューを、6~8人の児童からなる1~2グループとフォーカスグループディスカッションを実施した。加えて、経済都市ダルエスサラーム地域の自

治体の教育担当者1名、タンザニア・インスティテュート・オブ・エデュケーションの職員2名、教育関連のNGOとNPO計2団体の職員3名にも、聞き取り調査を行った。合計で大人20名、児童37名が本研究に参加した。調査対象者に(1)ニエレレの政策や思想に対する理解度と見解、(2)今日の教育現場で価値があるとされる教授法、(3)その実現を阻む障害など、を問うた。

4. 研究成果

本研究では、比較事例研究法とケイパビリティ・アプローチを用い、タンザニアの文脈において、歴史的・現代的に評価されている教育的価値観と学習者中心型教授法の教授的特徴の間に見られる共通点を検討した。

タンザニアの初代大統領ニエレレが独自のウジャマー思想を土台として提唱した「自立のための教育」が、学習者中心型教授法と類似の教育的要素を含む点は興味深い。物質的・精神的な植民地支配から脱し、農業を礎にタンザニアを自立させるための教育方法として、ニエレレは体験型学習、学校教育と実生活の繋がり、民主的な教師と児童の関係などを重視した。そして、このウジャマー思想は現代に受け継がれ、タンザニア人のアイデンティティや価値観形成の道徳的基盤となっている。

現在タンザニア政府は、国際教育政策に同調して学習者中心型教授法の借用を進めている。1990年代以降、同国は学習者中心型教授法を基軸とした教育政策を立案してきたが、その中でも「自立のための教育」に基づいた指導理念に則って学習者中心型教授法を推進することが謳われている。タンザニアの教育政策では、少なくとも文書上で、「自立のための教育」と学習者中心型教授法の理念を統合させようとしてきた政策的意思がみられる。

Bremner(2021)が提唱する6つの学習者中心の特徴を、先に示した3つの側面、つまり、(1)タンザニアで代々受け継がれてきた理想的な教授法、(2)世界的に展開されてきた学習者中心型教授法、(3)現代タンザニア人が有する教育的価値観、の三者間で比較したところ、類似点と相違点が浮き彫りになった。(1)、(2)、(3)のいずれもが、積極的参加、他の学習者との協働による学習を通じて開発される関連スキルに価値を置いていた。一方、権力の共有については、(1)、(2)のみで価値が置かれていたが、現代の教育関係者は重視していないようであった。具体的には、ニエレレ(Nyerere 1967)は学校における民主的な教師と生徒の関係を促進したが、本研究のインタビューでは誰も言及しなかった。また、学習者のニーズへの適応、自立性、形成的評価については、ニエレレの政策にはほとんど登場せず、インタビューでも語られなかった。同様に、現在の教育関係者は、暗記型と言われる試験に合格することを重視する傾向が示唆された。本研究で比較した(1)、(2)、(3)が重要視する教授的特徴を図1に示す。参加型、双方向コミュニケーション、実践型、個性重視は、(1)、(2)、(3)の三者間で共通して価値が置かれていた。

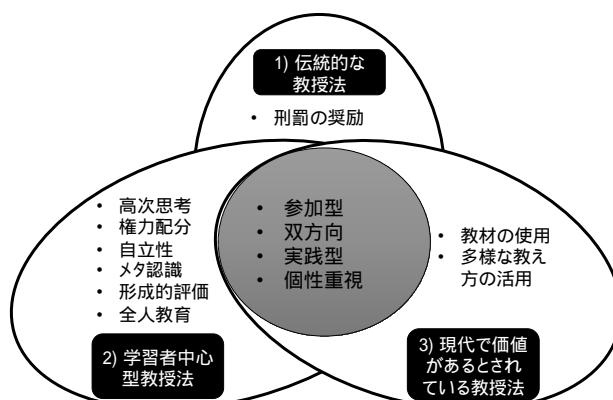


図1: タンザニアにおける新教授法フレームワーク

国際教育協力において、生徒の積極的な発言や参加を促す学習者中心型教授法は、国際教育政策を介して教育借用されてきた歴史を持つ。しかし、強制的に本教授法を模倣させようとしても、途上国の教育現場で当事者の混乱を招くことは、想像に難くない。本研究では、タンザニアにおいて思想の源泉となるような歴史的人物に焦点を当て、現代人の生活との関連性に注目し、同国における次世代の教授法を構築しようと試みた。また、「地域や家庭内の社会文化を基層として教授法が成り立つ」との立場に立ち、学校の敷地を超えた教育関係者も調査対象者とするここと、教育のあり方に関して人々が持つ価値観を多角的に捉えつつ、そのモデル化を試みた。元来そこに根付く教育思想やリソースと、政府が推進する学習者中心型教授法との調和を図ることにより、現状を大きく改変させることなく、また特別な財政導入を要せずして現場での展開が可能な潜在性を有する。本研究の結果はタンザニアで教授法改善に向けた試金石となり得るだけでなく、学習者中心型教授法を借用してきた他の途上国で、その社会文化に根差した教授法をモデル

化するための比較材料となり得る。

参考文献

- Bremner, Nicholas. 2021. "The Multiple Meanings of 'Student-Centred' or 'Learner-Centred' Education, and the Case for a More Flexible Approach to Defining it." *Comparative Education* 57 (2): 159-186. doi: 10.1080/03050068.2020.1805863
- Nyerere, Julius K. 1967. *Education for Self-Reliance*. Dar es Salaam: Government Printer.
- Schweisfurth, Michele. 2011. "Learner-Centred Education in Developing Country Contexts: From Solution to Problem?" *International Journal of Educational Development* 31 (5): 425-432. <https://doi.org/10.1016/j.ijedudev.2011.03.005>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 6件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Sakata Nozomi, Oketch Moses, Candappa Mano	4. 巻 44
2. 論文標題 Knitting the Comparative Case Study (CCS) with mixed methods: an attempt to extend the methodological application of CCS	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Research & Method in Education	6. 最初と最後の頁 193 ~ 207
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/1743727X.2020.1763944	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Sakata Nozomi	4. 巻 22
2. 論文標題 Capability Approach to Valued Pedagogical Practices in Tanzania: An Alternative to Learner-Centred Pedagogy?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Human Development and Capabilities	6. 最初と最後の頁 663 ~ 681
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/19452829.2021.1882409	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Sakata Nozomi, Oketch Moses, Candappa Mano	4. 巻 65
2. 論文標題 Pedagogy and History: Ujamaa and Learner-Centered Pedagogy in Tanzania	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Comparative Education Review	6. 最初と最後の頁 56 ~ 75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1086/712052	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Sakata Nozomi, Candappa Mano, Oketch Moses	4. 巻 53
2. 論文標題 Pupils' experiences with learner-centred pedagogy in Tanzania	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Compare: A Journal of Comparative and International Education	6. 最初と最後の頁 525 ~ 543
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/03057925.2021.1941769	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Sakata Nozomi	4. 巻 -
2. 論文標題 Is learner-centred pedagogy associated with pupils' positive attitudes towards learning? The case of Tanzania	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Compare: A Journal of Comparative and International Education	6. 最初と最後の頁 1~19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/03057925.2022.2036592	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakata Nozomi, Bremner Nicholas, Cameron Leanne	4. 巻 10
2. 論文標題 A systematic review of the implementation of learner centred pedagogy in low and middle income countries	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Review of Education	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/rev3.3365	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Bremner Nicholas, Sakata Nozomi, Cameron Leanne	4. 巻 94
2. 論文標題 The outcomes of learner-centred pedagogy: A systematic review	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Educational Development	6. 最初と最後の頁 102649 ~ 102649
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ijedudev.2022.102649	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Sakata Nozomi	4. 巻 -
2. 論文標題 Embracing the Messiness in Mixed Methods Research: The Craft Attitude	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Mixed Methods Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/15586898221108545	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Bremner Nicholas、Sakata Nozomi、Cameron Leanne	4. 巻 126
2. 論文標題 Teacher education as an enabler or constraint of learner-centred pedagogy implementation in low-to middle-income countries	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Teaching and Teacher Education	6. 最初と最後の頁 104033 ~ 104033
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.tate.2023.104033	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 坂田のぞみ	4. 巻 64
2. 論文標題 タンザニアにおける教育借用としての学習者中心型教授法 - 国際教育政策と初等教員の教授法解釈との相違をめぐって -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 比較教育学研究	6. 最初と最後の頁 47-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧 貴愛、竹内 裕希子、坂田 のぞみ	4. 巻 3
2. 論文標題 タイの防災教育に関する予備的検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 教育学研究	6. 最初と最後の頁 275 ~ 279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/53403	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Sakata Nozomi
2. 発表標題 Possibility of a Historical Lens into Pedagogical Analysis: The Case of Learner-Centred Pedagogy in Tanzania
3. 学会等名 World Council of Comparative Education Societies (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sakata Nozomi, and Edjah Hannah
2. 発表標題 Network Analysis of Learner-Centred Pedagogy: The Case of Ghana
3. 学会等名 Comparative and International Education Society (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sakata Nozomi, Bremner Nicholas, and Cameron Leanne
2. 発表標題 Learner-Centred Education in Low- and Middle-Income Countries
3. 学会等名 Comparative Education Society of Asia (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sakata Nozomi, Sakaguchi Masayasu, Asami Shimoda, and Takayoshi Maki
2. 発表標題 National Agenda for ICT in Education: A Comparative Analysis between South Africa and Japan
3. 学会等名 アフリカ教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sakata Nozomi, and Mgonda Nkanileka L.
2. 発表標題 A Possible Nexus between Ujamaa and Learner-Centred Pedagogy in Tanzania
3. 学会等名 Comparative and International Education Society (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sakata Nozomi, and Edjah Hannah
2. 発表標題 Does Learner-Centred Pedagogy Typify a Dependency Relationship? Stakeholder Interactions and Negotiations during Policy Formation Processes in Ghana
3. 学会等名 Comparative and International Education Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 坂田のぞみ
2. 発表標題 タンザニアにおける初等教員の解釈から解明する学習者中心型教授法の海外展開
3. 学会等名 日本比較教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Sakata Nozomi	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 200
3. 書名 Learner-Centred Pedagogy in the Global South: Pupils' and Teachers' Experiences	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ムゴンダ ナカニレカ (Mgonda Nkanileka L.)	ダルエスサラーム大学・School of Education・Senior Lecturer	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	イエイツ クリス (Yates Chris)	ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン・Institute of Education・Lecturer	
研究協力者	ブレムナー ニコラス (Bremner Nicholas)	エクセター大学・School of Education・Lecturer	
研究協力者	キャメロン リアン (Cameron Leanne)	エデュケーション・デベロプメント・トラスト・Senior Consultant	
研究協力者	エジヤ ハナ (Edjah Hannah)	ユニバーシティ・オブ・ケープコースト・Department of Vocational and Technical Education・Lecturer	
研究協力者	オクラ アブラハム (Okrah Abraham)	ユニバーシティ・オブ・ガーナ・レゴン・College of Education・Lecturer	
研究協力者	ヘナク ユージンアデュ (Henaku Eugene Adu)	ユニバーシティ・オブ・エデュケーション・ウィネバ・College of Education・Assistant Lecturer	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関